

三陸に再び海藻の森を

高崎のNPO・JWG



海藻の付着が確認できた海藻基盤(JWG提供)

磯焼けと食害阻止へ 炭素繊維基盤を設置

2011年3月の東日本大震災で甚大な被害を受けた三陸の海を改善しようと、高崎市のNPO法人「ジャパン・ウォーター・ガード(JWG)」が宮城県気仙沼市の地元漁師らと協力して、「三陸海の森づくりプロジェクト」に取り組んでいる。気仙沼湾に海藻の繁茂を促す装置を設置し、海産資源豊かな海域を取り戻そうとする取り組みで、小暮幸雄理事長は「気仙沼から全国にプロジェクトを広げていきたい」と意気込んでゐる。

東日本大震災 14年

小暮理事長によると、三陸を含む全国の海岸では海藻が著しく減少する「磯焼け」が進行している。背景には①海水中の栄養不足の沿

岸環境や海藻基盤の悪化③海洋の酸性化や海水温上昇④ウニや植食性魚類による食害—が考えられるという。

プロジェクトは、磯焼けが進行する気仙沼湾に炭素繊維を材料とした、軽くて丈夫な海藻基盤「ミラコンプ」を設置し、藻場の早期形成を図ることが狙い。海藻胞子や魚類のエサとなる微生物がミラコンプに付着することで、海藻や魚が増えるなど海が活性化するという。気仙沼市大島周辺の海域で昨年2月から実証調査に着手し、ミラコンプを設置したところ、海藻の着生が確認できたという。

プロジェクトの資金集めには、海洋植物が吸収する温室効果ガスをクレジットとして取引する「Jブルークレジット」の制度を利用。

会社運営において「酸化炭素(CO₂)」の削減が難しい企業が、環境維持活動などに取り組む法人に出資する形でクレジットを購入し、排出されるガスを他の場所で埋め合わせる「カーボンオフセット」することができるとしている。

JWGは今回のプロジェクトにおけるクレジット販売の認証を進めており、小暮理事長は「制度を利用することで地元の漁師たちにとって新たな産業の確立につながる」と説明。今後へ向け、さらなる制度の利用を呼びかけている。

(高橋和真)